

本学におけるレクリエーション・インストラクター 資格取得状況とその課題 ー資格取得卒業生アンケートをもとにー

奥 野 孝 昭・大 西 敏 浩

わが国のレクリエーション指導者養成は、(財)日本レクリエーション協会が、1949(昭和24)年に文部省との共催で最初の指導者養成講習会を開催し、その歴史は60年に及ぼうとしている。その後、各都道府県レクリエーション協会が中心となり一般養成を行い、現在も継続されている。これに加え新たに1983(昭和58)年度からは、大学・短大や専修学校等の高等教育機関で、日本レクリエーション協会が定める基本カリキュラムを開講し、担当教員によって行われる講座を終了した学生に、レクリエーション指導者資格を与える制度として、「レクリエーション指導者養成課程認定校」が発足した。その当時(1983年度)の課程認定校は、8校(8講座)であったが、その後年々増加し、2007年度は427校(489講座)になっている。

本学は、レクリエーション・インストラクター資格養成を2003(平成15)年度より行っており、5年が経過した。その間に100名を超える資格取得者を輩出したのだが、資格を取得した彼らが、職場や地域でこの資格をどのように活用しているか、またそのレクリエーション実践状況はどうなのか、資格養成担当者として把握しておく必要があるのではないかと考えた。

本学学生においては、他校ほどの更新率の低さはなかったものの、やはり資格登録を手放す卒業生が少なからずいた。彼らは、資格にこだわるよりも自分たちの実践に自信を持ち、積極的にレクリエーション実践を行っている者たちであった。この結果を元に、資格を取得する意味と、その資格養成の課題について、卒業生の追跡アンケートから考察してみた。

キーワード：レクリエーション・インストラクター、課程認定校、資格取得、学習効果

1. はじめに

大学全入時代を向かえ、全国の私立大学の約半数は定員を割っている現状である。そのため、各校生き残りのため、特徴ある学部・コースを設け、定員確保のために努力を続けている。『平成19年度私立大学教員の授業改善白書』によると、授業で直面している学生に関する問題点の上位は、基礎学力がない(56.3%)、学習意欲がない(37.2%)、コミュニケーションをしようとしなない、教員の言葉を理解できない(13%)、授業に出席しない(12.6%)となっている。

本学学生も同様の傾向があり、教員間でも、基礎学力の低下のため、従来通りの講義の進め方では教えられない。演習科目ではコミュニケーション能力の欠如が目立ち始め、授業が進みにくくなった等良く耳にする。したがって、必然的に各教員が授業の工夫を迫られている。

私たちも当然ながら、上記の事実感として感じている。特に、基本的な日常生活のマナー(挨拶・言葉づかい・身辺整理等)の低下、他者とのコミュニケーション能力の欠如は大きな問題

点だと考えている。ましてや、社会福祉士・保育士・介護福祉士という人を相手にする職業を目指す学生にとっては、上記の能力は必然的なものであり、身につけなければ、高齢者・児童・障がい者に対して支援する事が難しい。

そこで、「レクリエーション論」「レクリエーション活動援助法」等の授業を通し、他の学生とのコミュニケーションを取ることを体験的に学習する機会を多く取り入れ、学習の中で日常生活のマナーの大切さを気づかせ、コミュニケーション能力を養うよう工夫し、日々取り組んでいる。

2. レクリエーション資格の種類

レクリエーション資格は時代と共に見直しをされてきており、2008年4月現在は、(財)日本レクリエーション協会において、下記の4種類の資格に分類、養成されている。

①レクリエーション・インストラクター

集団を対象としてプログラムや活動を展開し、集団のコミュニケーションの促進やその中にいる個々人の主体性や協調性を引き出すこと、また、地域社会の課題に目を向けてレクリエーションを活用した人材を養成することを目指す。そのために、下記のような知識・技能を身につける。

- *プログラムやアクティビティを展開するリーダーとしての能力
- *グループワークを活用する支援者としての能力
- *地域活動の推進者（ファシリテーター）としての能力

②レクリエーション・コーディネーター

レクリエーションに関わる様々な人材や活動グループ・団体を結びつけ、健康づくりや青少年の健全育成、コミュニティづくり等、地域社会の課題に向け、継続して活動・事業の展開ができる人材を養成することを目指す。そのために、下記のような知識・技能を身につける。

- *事業運営の専門家としての能力
- *組織づくりのキーパーソンとしての能力
- *スタッフを育成・活用するマネージャーとしての能力

③福祉レクリエーション・ワーカー

高齢者・障害者を対象に、レクリエーションを活用して、自立支援や介護の目標にそった援助ができる人材。既存の活動にとらわれることなく、対象となる個々人にあわせたプログラムの提供や生活動作に楽しさを付加したり、リハビリ等を楽しく取り組むための工夫ができる人材を養成することを目指す。そのために、下記のような知識・技能を身につける。

- *プログラムの企画者としての能力
- *プログラムを提供する支援者としての能力
- *地域資源を活用するコーディネーターとしての能力
- *スタッフをまとめるリーダーとしての能力

④余暇生活開発士

余暇時間を自己啓発や自己開発のために活用する方法・情報を提供する等、人々の余暇支

援とその他のための機会や場づくりを行うための事業の展開、余暇時間を活用して地域社会に貢献する事業の展開ができる人材を養成することを目指す。そのために、下記のような知識・技能を身につける。

- * 余暇とそれを活用する意義を伝えるアドバイザーと能力
- * 様々な余暇活動を提供する支援者としての能力
- * 余暇時間を活用した社会貢献活動を促進するコーディネーターとしての能力

3. 本学におけるレクリエーション指導者養成の推移

本学は、1998（平成 10）年度より人間福祉学科（社会福祉士・精神保健福祉士養成）＜2006（平成 18）年度より社会福祉専攻と保育専攻に分離＞、2001（平成 13）年度より短期大学部生活科学科生活福祉専攻（介護福祉士養成）、2003（平成 15）年度より大学院（人間福祉専修博士課程）が設置されるなど、福祉領域学科は、年々発展を遂げてきた。また、スポーツ・レクリエーションの環境面でも、2004（平成 16）年度にはナイター設備を備えた 400 メートルトラックの取れるグラウンドが完成した。また、クラブ活動などの学外での活動にも重点的に取り組むようになってきた。

このような流れを受け、福祉領域学科のコミュニケーション能力アップの取り組みのひとつとして、2003（平成 15）年度より、短期大学部生活科学科生活福祉専攻が（財）日本レクリエーション協会より課程認定校として承諾された。また、人文社会学部人間福祉学科においても短期大学部の必要科目を科目履修する形を取ることでレクリエーション・インストラクター養成を始めた（表 1-1、表 1-2 参照）。その後、2006（平成 18）年度より人間福祉学科が社会福祉専攻と保育専攻に分離することにより、科目履修する形をやめ（ただし平成 20 年度までは該当学生がいるので残す）、それぞれの学科で養成する形に変更した（表 2-1、表 2-2 参照）。また、2009（平成 21）年度より社会福祉士及び介護福祉士のカリキュラムが改定されるため、現在、養成方法については見直し、検討中である。

* 2003（平成 15 年）年度養成課程

表 1-1 <大学 人間福祉学科>

種 別	科目名	単位数	備 考
共通専門科目	レクリエーション論	2	
専門教育科目	社会福祉援助技術現場実習 A	4	
	社会福祉援助技術実習指導 A	2	
	レクリエーション活動援助法	2	短大他学科履修
	スポーツ I	1	
	スポーツ II	1	
協会指定事業参加	大阪府レクリエーション協会主催等の事業参加（3 回以上）		

表 1－2＜短期大学部 生活科学科生活福祉専攻＞

種 別	科目名	単位数	備 考
共通専門科目	レクリエーション論	2	
専門教育科目	レクリエーション活動援助法	2	
	介護実習（第Ⅰ～Ⅲ段階）	10	
協会指定事業参加	大阪府レクリエーション協会主催等の事業参加（3回以上）		

＊ 2006（平成 18）年度養成課程

表 2－1＜大学 人間福祉学科社会福祉専攻＞

種 別	科目名	単位数	備 考
共通専門科目	レクリエーション論	2	
専門教育科目	社会福祉援助技術現場実習 A	4	
	社会福祉援助技術実習指導 A	2	
	レクリエーション活動援助法Ⅰ	1	
	レクリエーション活動援助法Ⅱ	1	
協会指定事業参加	大阪府レクリエーション協会主催等の事業参加（3回以上）		

表 2－2＜大学 人間福祉学科保育専攻＞

種 別	科目名	単位数	備 考
共通専門科目	レクリエーション論	2	
専門教育科目	小児体育Ⅰ	1	
	保育レクリエーション活動援助法	1	
	保育実習Ⅰ	5	
	保育実習Ⅱまたは保育実習Ⅲ	2	どちらかを選択
協会指定事業参加	大阪府レクリエーション協会主催等の事業参加（3回以上）		

＜生活福祉専攻＞

変更なし

＊レクリエーション・インストラクター養成カリキュラム（～2007年度）

＜理論＞ 20 時間

レクリエーションの基礎理論（3 時間）

21 世紀の社会とこれからのレクリエーション運動

レクリエーションの理解とレクリエーション運動の歴史

レクリエーション支援の理論（7 時間）

レクリエーション支援の展開と方法

レクリエーション支援の目標と理念

レクリエーション支援者の役割

レクリエーション組織の経営論（5 時間）

「クラブ」を育てる、運営する

市町村レクリエーション協会の役割と運営

レクリエーション運動を支える組織とその役割

レクリエーション・サービス論（5時間）

事業を実施する、事業を評価する、事業と安全

＜実技＞26時間

コミュニケーション・ワーク（7時間）

ホスピタリティ・トレーニング

アイスブレイキングの技法

レクリエーション種目の実際（19時間）

A群：生涯スポーツ種目・活動

B群：ネイチャーレク、自然体験活動・種目

C群：芸術・文化・学習活動に関係した種目・活動

D群：福祉レクを意識した活動

E群：総合的な活動

＊上記5群から2つ以上の群で学習する（本学は、A群・D群を中心に学習する）

選択活動種目

ニュースポーツ種目、ネイチャーレクリエーション種目、

高齢者レクリエーション援助に役立つ選択活動種目

介助者と障がい者が一緒に楽しむ選択活動種目

＜支援実習＞（4時間）

レク種目の実際に学習した種目、活動の技術指導演習

アイスブレイキングの実習

行事を実施・評価する技術の演習

＊「レクリエーション活動援助法」シラバス

1. レクリエーションの基本的理解
2. レクリエーションの活動領域と意義
3. 社会福祉とレクリエーションの意義
4. 利用者とレクリエーション
5. 介護従事者とレクリエーション
6. レクリエーション活動の主体について
7. 個人とレクリエーション
8. 集団とレクリエーション
9. レクリエーション活動計画の作成の概要
10. レクリエーション活動計画の目的
11. レクリエーション活動計画の作成・実施上の配慮
12. レクリエーション活動の発表

13. レクリエーション活動の発表
14. レクリエーション活動の評価の視点
15. レクリエーション活動発表後の自己評価及び定期試験
16. レクリエーションの活動援助者と利用者の役割分担
17. レクリエーション活動援助者間の役割とチームワーク
18. レクリエーション活動にともなう安全確保等
19. 治療的意味合いを含めたレクリエーション活動の開発の必要性
20. 高齢者のレクリエーション活動と援助展開例
21. 高齢者のレクリエーション活動計画の作成
22. 高齢者のレクリエーション活動の発表
23. 高齢者のレクリエーション活動の発表後の意見交換
24. 障がい者のレクリエーション活動と展開例
25. 障がい者のレクリエーション活動計画の作成
26. 障がい者のレクリエーション活動の発表
27. 障がい者のレクリエーション活動の発表後の意見交換
28. レクリエーション活動援助法の実例Ⅰ
29. レクリエーション活動援助法の実例Ⅱ
30. 定期試験とまとめ

* 人間福祉学科社会福祉専攻と生活福祉専攻の実技科目は、「レクリエーション活動援助法」のシラバスを、レクリエーション・インストラクター養成カリキュラムを読み替え実施している。(詳細は、本学『授業概要』を参照のこと)

4. 追跡調査 (対象と方法)

本研究は、本学 2003 年度～2007 年度のレクリエーション卒業生レクリエーション・インストラクター資格取得者に対して、郵送法にて質問紙調査を実施した。調査期間は、2007 年 11 月～2008 年 5 月である。有効回答数は 68、回収率は 63.6% (68 / 107) であった。(2007 年度の卒業生は、まだ卒業して 2 ヶ月から経っていないため、今回の考察からは省き、次回に回す事にする)

アンケート対象者(表 3)も、回答者も大学の人間福祉学科(主として社会福祉士国家試験受験資格取得者)と短期大学部の生活科学科生活福祉専攻(介護福祉士資格取得者)とは、ほぼ同数であった。

表 3 対象者の属性（学科・専攻、卒業年度別）

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	小計	2007 年度	合計
(大学) 人間福祉学科	11	9	17	16	53	17	70
(短期大学部) 生活福祉専攻	－	15	21	18	54	13	67
合 計	11	24	38	34	107	30	137

注：アンケート考察対象者は 2003 年度～ 2006 年度卒業生である。

質問紙の調査項目は、在学中のレク資格取得動機、現在の仕事と資格との関連、現在のレク活動状況＜職場・地域（地元）＞、『月間 R e c』（情報誌）の活用状況、大阪府レクリエーション協会主催イベント及び広報誌活用状況、資格更新状況、資格取得後の活動意識についての項目であり、主として 6 段階評価記入と自由記述事項により構成されている。項目の内容については、2007 年 9 月に予備調査として面接法によるものと、2007 年 10 月～2008 年 3 月、セラピューティック・レクリエーション研究会（月 1 回開催）にて、他校課程認定校養成教員から、助言を頂く事により、得た事項を検討し設定した。

5. 調査結果と考察

(1) 回答者の属性

次に今回のアンケート回答者の属性を示す（表 4－1・表 4－2）。

これによると、2006 年度卒業生の回答率が低くなっているが、概ね 6 割程度の回答率であったことがいえる。アンケート回答者の就職先別の属性（表 4－3・表 4－4）によると、アンケート回答者においては 72.1％もの者が福祉施設に勤務しており、特に生活福祉専攻においては、85.3％と圧倒的な数字となっている。

表 4－1 回答者の属性（学科・専攻、卒業年度別）

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	計
(大学) 人間福祉学科	7	7	12	8	34
(短期大学部) 生活福祉専攻	－	11	13	10	34
合 計	7	18	25	18	68

表 4－2 回答者の属性別による回答率（小数第 3 位四捨五入）

	2003 年度	2004 年度	2005 年度	2006 年度	計
(大学) 人間福祉学科	0.64	0.78	0.71	0.50	0.64
(短期大学部) 生活福祉専攻	－	0.73	0.62	0.56	0.63
合 計	0.64	0.75	0.66	0.53	0.64

表 4－3 回答者の属性（学科・専攻、就職先大区分別）

	福祉施設	福祉施設以外	合計
（大学） 人間福祉学科	20	14	34
（短期大学部） 生活福祉専攻	29	5	34
合計	49	19	68

表 4－4 回答者の属性（学科・専攻、就職先種類別）

	老人福祉施設						障害者福祉施設 （グループホーム） （認知症対応型共同生活介護）	児童福祉施設	病院	大学院等進学	無職	一般企業	市役所等公的機関	無回答等	合計
	特別養護老人ホーム	有料老人ホーム	介護老人保健施設	養護老人ホーム	（デイサービスセンター）	通所介護									
（大学） 人間福祉学科	5	1	1	0	3	0	7	3	2	3	1	5	3	0	34
（短期大学部） 生活福祉専攻	17	1	4	2	3	2	0	0	1	0	2	0	0	2	34
合計	22	2	5	2	6	2	7	3	3	3	3	5	3	2	68

この回答の中で「大学院等進学」と回答した者の中には、大学院等に進学後、福祉施設に就職する可能性もある。また、「病院」の勤務にしても医療ソーシャルワーカーとして勤務している者もあり、「市役所等公的機関」でも詳細を見れば社会福祉協議会や福祉担当部署である。それに「一般企業」でも福祉機器を取り扱っている会社に就職する者がいるなど、進路としてみれば大きく福祉とくくられなくもない。

内訳においては、生活福祉専攻卒業生の「特別養護老人ホーム」就職が、同専攻の半数を占め、人間福祉学科卒業生を合わせて、全体の 32.4% という高さである。また人間福祉学科においては、「障害者福祉施設」の 7 名が最大値となっている。

(2) レクリエーション・インストラクター資格取得の動機

レクリエーション・インストラクターを取得してみようと思った動機について尋ねてみた。以下、質問項目と度数分布を示す。

設問 1 なぜ、レクリエーション・インストラクターを取得しようと思いましたか。

- ① 将来の仕事などに役立てよう。
- ② 就職に有利ではないかと思った。
- ③ 取得する資格は多い方がいい。
- ④ 資格取得より、その過程での学習が大切だと思った。
- ⑤ 履修するときは、資格のことは意識しなかった。

⑥ その他（自由記載）

この設問 1 ①の解答項目では、所属による差異はそれほど感じられなかった（表 5）。

「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」回答が合わせて 67. 6%と、全体的に「将来の仕事に役立てよう」とレクリエーション・インストラクター資格を取得する学生がかなり多いことがわかった（図 1）。

表 5 設問 1 ① 「将来の仕事などに役立てよう」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	17	25.0%	10	29.4%	7	20.6%
ややあてはまる	29	42.6%	14	41.2%	15	44.1%
どちらかといえば、あてはまる	10	14.7%	6	17.6%	4	11.8%
どちらかといえば、あてはまらない	8	11.8%	2	5.9%	6	17.6%
ややあてはまらない	2	2.9%	1	2.9%	1	2.9%
まったくあてはまらない	2	2.9%	1	2.9%	1	2.9%
合 計（n）	68	100.0%	34	100.0%	34	100.0%

図 1 設問 1 ① 「将来の仕事などに役立てよう」回答者全体の円グラフ

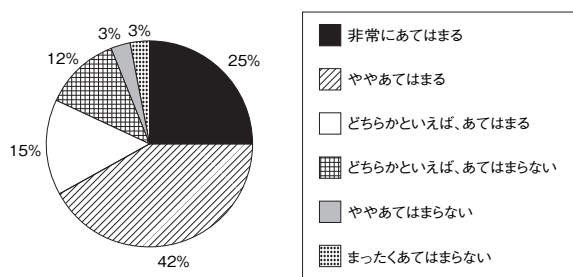
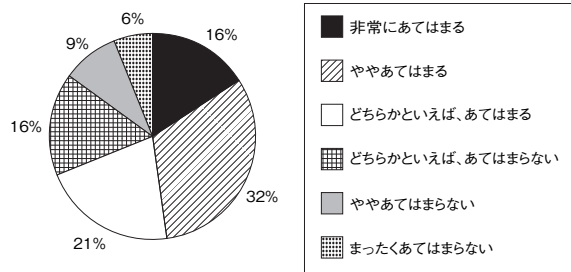


表 6 設問 1 ② 「就職に有利ではないかと思った」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	11	16.2%	5	14.7%	6	17.6%
ややあてはまる	22	32.4%	8	23.5%	14	41.2%
どちらかといえば、あてはまる	14	20.6%	11	32.4%	3	8.8%
どちらかといえば、あてはまらない	11	16.2%	5	14.7%	6	17.6%
ややあてはまらない	6	8.8%	3	8.8%	3	8.8%
まったくあてはまらない	4	5.9%	2	5.9%	2	5.9%
合 計（n）	68	100.0%	34	100.0%	34	100.0%

図2 設問1②「就職に有利ではないかと思った」回答者全体の円グラフ



この設問の解答項目では、短期大学の学生の方が、「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」と回答する者の割合が高く（58.8%）、大学生（38.2%）と比べてはっきりとした「就職」をやや意識している傾向にあることが読み取れる。

やはり、短期大学部と大学とでは学習年限が違い、卒業後の就職に対する意識は、短期大学部の学生の方が比較的高いということの一般論がここでもあてはまりそうだ。

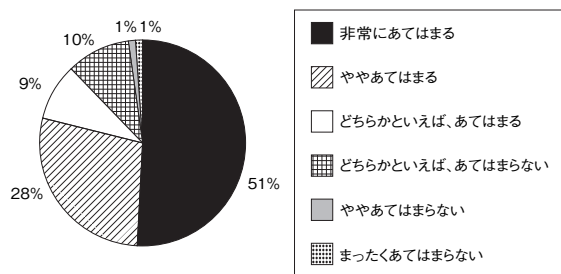
しかしながら、全体としては先の「将来の仕事などに役立てよう」の回答項目の方が「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」回答者の割合が高く、自分の進路を含めて資格についてもまだまだ不確定のところがあるような感じであった。

自由記載による回答においても、「あまり耳慣れない名称のため、色んな場面で有利になるのではと感じていました」という意見が代表的であるように、履修にあたっては漠然と考えている傾向が見て取れた。

表7 設問1③「取得する資格は多い方がいい」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	34	50.0%	17	50.0%	17	50.0%
ややあてはまる	19	27.9%	12	35.3%	7	20.6%
どちらかといえば、あてはまる	6	8.8%	2	5.9%	4	11.8%
どちらかといえば、あてはまらない	7	10.3%	1	2.9%	6	17.6%
ややあてはまらない	1	1.5%	1	2.9%	0	0.0%
まったくあてはまらない	1	1.5%	1	2.9%	0	0.0%
合 計 (n)	68	100.0%	34	100.0%	34	100.0%

図3 設問1③「取得する資格は多い方がいい」回答者全体の円グラフ



われわれレクリエーション担当教員は、このレクリエーション・インストラクターをそれぞれの学科で取得する資格（生活科学科生活福祉専攻なら介護福祉士、人間福祉学科なら社会福祉士国家試験受験資格）をベースとして、その付加価値をつけるものだと認識している。そして、このことは、授業の中でも強調するし、また入学説明会のときでも説明している。

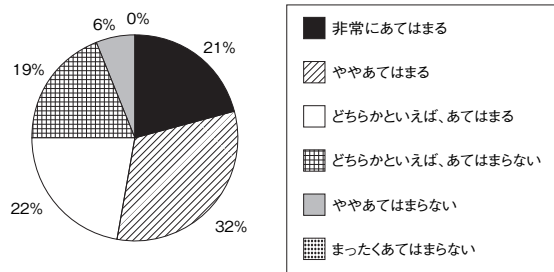
学生にとっては、将来に対する不安もあり、また自身を高めるという意味においても、自分のひとつの「武器」としての資格取得に励む傾向が見られる。

「先のことはわからないので、資格のとれるものは取って、実践することで、多少は身につけておけると思ったから」という自由記載回答がその代表例である。

表 8 設問 1 ④ 「資格取得より、その過程での学習が大切だと思った」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	14	20.6%	11	32.4%	3	8.8%
ややあてはまる	22	32.4%	12	35.3%	10	29.4%
どちらかといえば、あてはまる	15	22.1%	7	20.6%	8	23.5%
どちらかといえば、あてはまらない	13	19.1%	3	8.8%	10	29.4%
ややあてはまらない	4	5.9%	1	2.9%	3	8.8%
まったくあてはまらない	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
合 計 (n)	68	100.0%	34	100.0%	34	100.0%

図 4 設問 1 ④ 「資格取得より、その過程での学習が大切だと思った」回答者全体の円グラフ



この回答項目では、大学生と短期大学部生とでは大きな差異が見られた。これは、大学と短期大学部とでの学びの特徴の差と考えることが妥当ではないと思われる。すなわち、実務教育を柱とする短期大学部においては、学びの過程を重視することはもちろんだが、それよりも結果としての資格取得や就職を意識するのである。これに対して大学においては、幅広い知識を深く学ぶというところに力点がおかれる。

そうしたなか、レクリエーション関連科目について「学習することで、どのような気持ちで臨むかなど、基本的な知識を得たかった。」（自由記載回答例）などと、学習を重視する学生が多く受講してくれていたという結果を得た。こうした資格取得だけを目的とせず、その学びの過程をも重視することで、学習への意欲や結果としての学習効果が得られるものと思われる。

(3) 現在の仕事とレクリエーション・インストラクター資格との関連

期待して取得したこのレクリエーション・インストラクター資格であるが、実際卒業生達は、資格をどう活用しているのか、また、卒業後はそれぞれの仕事の中で、レクリエーション・インストラクター資格取得中に学んだことがどのような形でプラスになっているか、現在の状況をアンケートでさらに尋ねてみることにした。

設問 2 現在の仕事とレクリエーション・インストラクター資格との関連について質問します。

- ① レクリエーション・インストラクター資格が仕事等に活用できている。
- ② 資格を持っていることが自信につながっている。
- ③ 資格を持っていることで、レクリエーション支援の場面が多くある。
- ④ 現場に出て、この資格の大切さを実感した。
- ⑤ 資格取得のため学習した内容が役立った。
- ⑥ この資格を持っていることが就職に有利に働いた。
- ⑦ 自分自身の余暇活動の充実にも役立てられている。
- ⑧ レクリエーション支援の経験の中での自己の成長を感じている。
- ⑨ 周囲の人にもレクリエーション・インストラクター資格をとってもらいたいと思う。

表 9 設問 2 ① 「レクリエーション・インストラクター資格が仕事等に活用できている」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	2	3.0%	1	3.0%	1	3.0%
ややあてはまる	4	6.1%	1	3.0%	3	9.1%
どちらかといえば、あてはまる	7	10.6%	6	18.2%	1	3.0%
どちらかといえば、あてはまらない	6	9.1%	2	6.1%	4	12.1%
ややあてはまらない	20	30.3%	7	21.2%	13	39.4%
まったくあてはまらない	27	40.9%	16	48.5%	11	33.3%
合 計 (n)	66	100.0%	33	100.0%	33	100.0%

※無回答等欠損値が2つあった（人間福祉、生活福祉各1）。

担当者としては、機関紙や会議等で見聞きするにつけ、「レクリエーション・インストラクター資格を仕事の中で活用できているのか」ということに対する疑問があり、この設問を設定したのだが、現実のこのアンケート結果はまさに現在のレクリエーションの置かれている状況を表しているものであった。

例えば、「うちはレクリエーション活動を行っていません」と実習指導担当職員がおっしゃる実習施設もあり、私が実習指導の授業を担当する中でも、福祉施設において「レクリエーションが無くなった」と感じている実習生が少なからずいるという事実もある。

しかし現実はどうかということ、決してレクリエーションが無くなったというわけではない。確かに、誕生会をはじめとする「全員参加」を原則とする集団型の行事・イベントは減ってきているのは事実である。しかし、だからと言って「レクリエーションが無くなった」と評価するには早計である。

レクリエーションには大きく分けて、集団レクリエーションと個別レクリエーションがある。

つまり、集団レクリエーションという、目に見えやすい形のレクリエーションが減っているに過ぎないのである。しかし一方で、個別ケアに取り組むときに、職員はいかに利用者の「意欲」を引き出そうか模索している。そのときに活用されるのが、個別レクリエーションである。すなわち、アセスメント（事前評価）からプランニング（計画策定）、インプレメンテーション（実施）、そしてエバリュエーション（評価）とつながる関わりは、レクリエーション援助のモデルであり、同時に個別援助そのものであると考える。

このことは、来年度から実施される介護福祉士の養成カリキュラムからも伺えることである。来年度からの新カリキュラムでは、「レクリエーション活動援助法」という必修科目名がなくなった。しかし、そこでレクリエーション自体が不要だというのではなく、介護技術を代表とする介護福祉士の養成カリキュラム全体の中でレクリエーション的な支援方法が広く論じられていくという方向性なのである。

だが現実には、レクリエーションが見えにくい存在であることに変わりはなく、最近ではむしろ全く見えなくなってしまったのではないかと懸念するのも正直なところである。

表 10 設問 2③ 「資格を持っていることで、レクリエーション支援の場面が多くある」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	2	3.0%	1	3.0%	1	3.0%
ややあてはまる	1	1.5%	0	0.0%	1	3.0%
どちらかといえば、あてはまる	3	4.5%	2	6.1%	1	3.0%
どちらかといえば、あてはまらない	10	15.2%	6	18.2%	4	12.1%
ややあてはまらない	13	19.7%	1	3.0%	12	36.4%
まったくあてはまらない	37	56.1%	23	69.7%	14	42.4%
合 計 (n)	66	100.0%	33	100.0%	33	100.0%

※無回答等欠損値が2つあった（人間福祉、生活福祉各1）。

このアンケートにおいて、何をもって「レクリエーション支援」とするのかというところの定義づけがはっきりしておらず、あくまで卒業生たちの主観の部分の脱却できないが、少なくとも卒業生たちが就職した事業所において、「レクリエーション・インストラクター資格所持＝レクリエーション支援」という結びつきにはなっていない事実が浮かび上がってきた。

表 11 設問 2⑥ 「この資格を持っていることが就職に有利に働いた」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	1	1.5%	0	0.0%	1	3.1%
ややあてはまる	3	4.6%	1	3.0%	2	6.3%
どちらかといえば、あてはまる	2	3.1%	1	3.0%	1	3.1%
どちらかといえば、あてはまらない	17	26.2%	11	33.3%	6	18.8%
ややあてはまらない	10	15.4%	3	9.1%	7	21.9%

まったくあてはまらない	32	49.2%	17	51.5%	15	46.9%
合 計 (n)	65	100.0%	33	100.0%	32	100.0%

※無回答等欠損値が3つあった（人間福祉1、生活福祉2）。

先述したように、「うちは、レクリエーション活動を行っていません」と職員がおっしゃる施設があるという事実もあり、またレクリエーション・インストラクター資格自身に対する採用側の認知度の問題なのか、残念ながら学生が期待するほどは、この資格取得が就職に有利に働くことは、今のところ乏しいようである。

この点を改善していくことが、資格担当者としての責務であると強く感じるところである。

しかし一方で、施設によっては利用者のケアに、このレクリエーションの視点を多く取り込む実践をされているところもあり、そういった施設への就職には大きな武器となったようだ。

ここまでは、現状としてレクリエーション・インストラクター資格を取得する価値は低いのではないかという疑念すらわきあがってくるような回答データばかり並んだ。

果たして、学生はこの資格取得をどのように受け止めているのだろうか。

本資格は、登録更新制である。資格を取得し、2年毎に更新することで、この資格を維持できるというものである。「要らない資格」なら更新しない可能性が強いのではないかと考えた。

設問6 レクリエーション・インストラクターの登録について質問します。

表 12－1 設問6①現在、登録（更新）していますか。

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
はい	46	68.7%	23	69.7%	23	67.6%
いいえ	21	31.3%	10	30.3%	11	32.4%
合 計 (n)	67	100.0%	33	100.0%	34	100.0%

表 12－2 設問6②次回、登録更新をしようと思いますか。

（上記の質問に「はい」と回答した者のみが回答）

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
はい	20	42.6%	10	41.7%	10	43.5%
未定等	23	51.1%	11	50.0%	12	52.2%
いいえ	3	6.4%	2	8.3%	1	4.3%
合 計 (n)	46	100.0%	23	100.0%	23	100.0%

現状で約3分の2（全体の68.7%）の学生が資格登録をしていることがわかり、そのうちの4割以上（全体の42.6%）の学生が次回も更新すると決めている。一方で半数を超える（全体で51.1%）学生が、この資格の活用を含め登録更新を検討中である。

(4) 登録更新の理由

「仕事に活用できていない」(表9)、「支援場面も多くない」(表10)、「就職に有利に働くわけでもない」(表12)という悪い状況にもかかわらず、資格を登録、更新する学生が比較的多い(表12-1、表12-2)理由は何だろうか。アンケートでは、そのことも尋ねている。

設問6③ 登録更新を考えている人にお聞きします。なぜ登録更新をしようと思っていますか。

(この設問は、「よくあてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4択で尋ねている)

表13-1 ①登録更新をするのは、(資格を取得しているのだから)当然である。

	度数	割合	有効	累積
よくあてはまる	5	7.4%	17.2%	17.2%
ややあてはまる	12	17.6%	41.4%	58.6%
ややあてはまらない	11	16.2%	37.9%	96.6%
まったくあてはまらない	1	1.5%	3.4%	100.0%
合計	29	42.6%	100.0%	
非該当、無回答	39	57.4%		
合 計	68	100.0%		

表13-2 ②現在、この資格を活用しているので、登録更新する。

	度数	割合	有効	累積
よくあてはまる	1	1.5%	3.4%	3.4%
ややあてはまる	7	10.3%	24.1%	27.6%
ややあてはまらない	13	19.1%	44.8%	72.4%
まったくあてはまらない	8	11.8%	27.6%	100.0%
合計	29	42.6%	100.0%	
非該当、無回答	39	57.4%		
合 計	68	100.0%		

表13-3 ③登録更新をしないと、教員に申し訳ないと思っている。

	度数	割合	有効	累積
よくあてはまる	0	0.0%	0.0%	0.0%
ややあてはまる	3	4.4%	10.0%	10.0%
ややあてはまらない	15	22.1%	50.0%	60.0%
まったくあてはまらない	12	17.6%	40.0%	100.0%
合計	30	44.1%	100.0%	
非該当、無回答	38	55.9%		
合 計	68	100.0%		

表 13－4 ④自動更新であるので、特に意識していない。

	度数	割合	有効	累積
よくあてはまる	0	0.0%	0.0%	0.0%
ややあてはまる	4	5.9%	13.8%	13.8%
ややあてはまらない	16	23.5%	55.2%	69.0%
まったくあてはまらない	9	13.2%	31.0%	100.0%
合計	29	42.6%	100.0%	
非該当、無回答	39	57.4%		
合計	68	100.0%		

だが、これらの質問では登録更新の理由が読み取れなかった。わずかに、①の「登録更新をするのは、（資格を取得しているのだから）当然である」に対して「よくあてはまる」、「ややあてはまる」と回答した者が若干多い（累積 58.6%）という程度である。

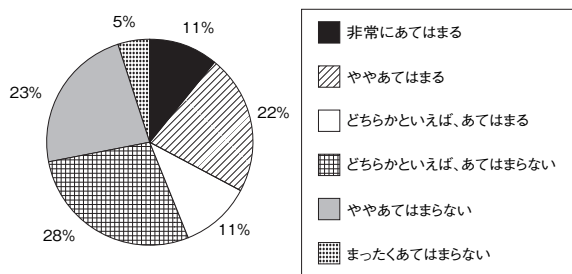
そこで、他の質問から更新の理由が探れないかと、アンケート結果を再吟味してみた。

すると、設問 2 の中でもっとも「非常にあてはまる」、「ややあてはまる」回答者が多かったのが、次の「資格取得のために学習した内容が役立った」であった。

表 14 設問 2 ⑤ 「資格取得のために学習した内容が役だった」

	回答者全体		人間福祉		生活福祉	
	度数	割合	度数	割合	度数	割合
非常にあてはまる	7	10.6%	3	9.1%	4	12.1%
ややあてはまる	15	22.7%	9	27.3%	6	18.2%
どちらかといえば、あてはまる	7	10.6%	5	15.2%	2	6.1%
どちらかといえば、あてはまらない	19	28.8%	7	21.2%	12	36.4%
ややあてはまらない	15	22.7%	6	18.2%	9	27.3%
まったくあてはまらない	3	4.5%	3	9.1%	0	0.0%
合 計 (n)	66	100.0%	33	100.0%	33	100.0%

図 5 設問 2 ⑤ 「資格取得のために学習した内容が役だった」回答者全体の円グラフ



そして、この回答を設問 1 の回答項目とクロスさせてみると、以下のような結果を得た。

表15 「将来の仕事などに役立てよう」と「資格取得のために学習した内容が役立った」とのクロス表

		設問2 資格取得のために学習した内容が役立った						
		非常に あてはまる	ややあて はまる	どちらか といえば、 あてはま る	どちらか といえば、 あてはま らない	ややあて はまらない	まったく あてはま らない	合 計
設問1 将来の仕 事などに 役立てよ う	非常にあてはまる	3	4	4	1	3	1	16
	ややあてはまる	2	9	3	10	5	0	29
	どちらかといえば、 あてはまる	2	2	0	1	4	1	10
	どちらかといえば、 あてはまらない	0	0	0	6	1	0	7
	ややあてはまらない	0	0	0	1	0	1	2
	まったくあてはま らない	0	0	0	0	2	0	2
	合 計 (n)	7	15	7	19	15	10	66

カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ2乗	44.636 ^a	25	.009
尤度比	42.054	25	.018
線型と線型による連関	8.028	1	.005
有効なケースの数	66		

a. 33 セル (91.7%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .09 です。

「将来に役立てよう」として、レクリエーション・インストラクター資格を取得したものが、結果として「資格取得のために学習した内容が役立った」と回答した者と1%水準で有意であった。

「将来の仕事に役立てよう」というモチベーションが、学習効果などに大きく影響することが改めてわかった。そしてさらにそれが他人への推薦にも結びついていくのである。

表16 「将来の仕事などに役立てよう」と「周囲の人にもレクリエーション・インストラクター資格をとってもらいたいと思う」とのクロス集計

		設問2 周囲の人にもレクリエーション・インストラクター資格をとってもらいたいと思う						
		非常に あてはまる	ややあて はまる	どちらか といえば、 あてはま る	どちらか といえば、 あてはま らない	ややあて はまらない	まったく あてはま らない	合 計
設問1 将来の仕 事などに 役立てよ う	非常にあてはまる	2	3	3	5	0	3	16
	ややあてはまる	2	4	6	6	8	2	28
	どちらかといえば、 あてはまる	0	4	3	0	2	1	10
	どちらかといえば、 あてはまらない	0	0	2	4	1	1	8
	ややあてはまらない	0	0	0	0	0	2	2
	まったくあてはま らない	0	0	0	0	2	0	2
	合 計 (n)	4	11	14	15	13	9	66

カイ2乗検定

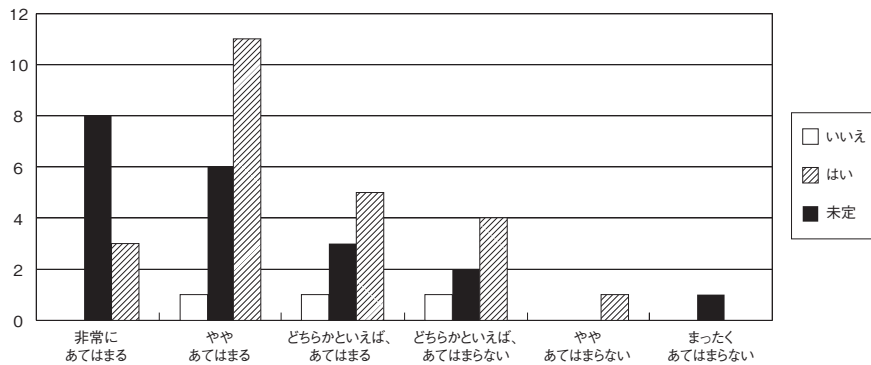
	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ 2 乗	39.444 ^a	25	.033
尤度比	39.036	25	.037
線型と線型による連関	4.303	1	.038
有効なケースの数	66		

a. 33 セル (91.7%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .12 です。

表 17 設問 1 ①「将来の仕事に役立てよう」と、設問 6 ②「次回、登録更新しようと思いますか」のクロス集計

	いいえ	はい	未定	合計	割合
非常にあてはまる	0	8	3	11	23.4%
ややあてはまる	1	6	11	18	38.3%
どちらかといえば、あてはまる	1	3	5	9	19.1%
どちらかといえば、あてはまらない	1	2	4	7	14.9%
ややあてはまらない	0	0	1	1	2.1%
まったくあてはまらない	0	1	0	1	2.1%
合 計 (n)	3	20	24	47	100.0%

図 6 設問 1 ①「将来の仕事に役立てよう」と、設問 6 ②「次回、登録更新しようと思いますか」のクロス集計の棒グラフ



「将来の仕事に役立てよう」と資格取得した者は、現状としての資格の活用状況がどうであれ、次回更新に前向きであると言える。初期の学習意欲は長く持続するとは言えるのではないだろうか。

一方、「就職に有利」だとして、資格を取得しようとした者や「資格を仕事に活かしている」と回答している者が、必ずしも資格登録・更新に結びついていないという結果も得た。

登録・更新について自由記載で理由を聞いたところ、以下の回答を得た。

「資格を利用している、していないに関わらず、自分が必死になってとった資格だし、これからは自分の中での思い出として更新していきたい」(介護老人保健施設に勤務、次回も更新する予定)、「これから先、どうなるかはわからないから、無駄にすることはないと思う」(一般企業＝販売業に勤務、次回も更新する予定)、「レクリエーションに力を入れている施設では、

採用基準として目安にしていると言っていたため、資格を持っていた方がいいと思ったから」(元福祉施設勤務、次回も更新する予定)というこれらの回答からは、資格は、それを就職等で活かすことが取得の一つの動機としてあり、また、自己の評価を高めるものとして活用していきたいという意図が窺えるものであった。

しかし一方で、「就職してからレクを行うことがほとんどなかった」(身体障害者療護施設を退職、更新をしなかった)、「先生にレクリエーションを教えて頂き、皆と学んだ時間はむだではなかったと思っています。しかし、自分の今の職場で“インストラクターだからできること”というのは特にありません。毎月『月刊 Rec』(注：日本レクリエーション協会が資格取得者に対してほぼ毎月発行している機関誌)だけを読み、特に何かのイベントに参加するでもなく・・・、自分にとって資格をただ持っているだけで活用できておらず、意味がないのではないかと思い、更新しませんでした」(児童養護施設に勤務、更新しなかった)という現実的な回答もあった。

「現在の職場では、この資格を活用しきれていないので、どうしようか悩んでいる」(特別養護老人ホームに勤務、次回更新は未定)、「更新料を払うほど、活用できていなかった」(元福祉施設勤務、更新しなかった)、「資格取得させていただきましたが、活用しきれず、このままただ更新していくことに疑問を感じました。自分の向上心の問題なのですが・・・。せっかくいろいろと教えていただき、資格を取得させていただいたのにすみません」(児童養護施設に勤務、更新しなかった)、「今現在、仕事が忙しくほとんどと言っていいくらい活用できていません」(福祉用具販売に従事、次回更新は未定)という回答を見ると、やはり現実問題として、「使える」かどうかということが、登録・更新において重要視されている傾向がみてとれた。

それは、「現在、レクリエーション活動に携わることが少なく、資格を活かせていない。資格の有無に関係なく、レクリエーションの基礎を講義で身につけていれば、誰でも行うことができる」(知的障害者入所更生施設に勤務、次回更新は未定)、「資格を持っている、持っていないかよりは、現場では個人の能力をかわれる場合が多い」(特別養護老人ホームに勤務、更新しなかった)という中において、このレクリエーション資格はまさに付加価値以上のものでも、それ以下のものでもないことを示している。

一方で、「正直言ってインストラクターの資格を活用できていなかったと思います。しかし、授業で習った手遊び等はリハビリも兼ねてよく使っています」(特別養護老人ホームに勤務、更新しなかった)、「資格は、持っていても持っていなくても、あまり変わらないと感じました。しかし、大学でレクリエーションについて学んだことはすごく役に立っています」(病院で介護福祉士として勤務、更新しなかった)と、学びの過程を成果としてあげてくれた意見もある。

そうすると、「資格登録(更新)には費用がかかるので、更新をこの先続けていくとなると、少し考えてしまいます。資格を持っていない人でも、たくさんのレクを知っていたり、進行が上手であったりします。資格取得者は職場にはほとんどいません。“レクリエーション・インストラクター”という資格は知られていないと感じています」(特別養護老人ホームに勤務、次回更新は未定)という回答が寄せられるのも当然の帰結なのかも知れない。

(5) まとめにかえて～今後のレクリエーション・インストラクター養成のあり方について～

レクリエーション・インストラクター資格を活用できている者は、資格の登録更新に積極的ではないかと予測したのだが、アンケートでは逆の結果となり、職場等でレクリエーション実践を多く行っていると回答した者の更新率はそれほど高くなく、活用できていないとする一般企業勤務の者の方が、「将来（の転職等と思われる）のために」資格を堅持したいという意向があった。

「資格」とは、やはり就職に有利というイメージがあり、それが資格取得の動機になったことは容易に想像がつくが、このレクリエーション・インストラクター資格については、現在のところそれほど効果をもたらさないことがわかった。

では、なぜこの資格が存在し、そしてその養成をしていくのだろうか。今、その本質が問われているのである。

卒業生のうち、レクリエーション技術を体得したと考えている者は、学びや実践の中で自信を深め、資格に固執していない。レクリエーションの必要性を感じ、自ら学ぶ姿勢があるならば、レクリエーション・インストラクター資格を登録更新していなくても、私たちは心配はないと考える。

私たちは、先にも触れたように、この資格は単独として存在するのではなく、社会福祉士や介護福祉士、保育士といったその学科・専攻で取得できる特有の資格に「付加価値」をつけるものと認識している。すなわち、「こういうこと（レクリエーションの種目の一つ）もできますよ」と学生が自信を持って専門職に就けるよう、また、個別支援の際のひとつの道具としてのレクリエーションの知識と技術を授けているつもりである。

個性が埋没しがちな現代の学生を、逆に個性を求める社会に対してアピールできるよう、これまで学生を支援してきた。つまり、ホスピタリティ・トレーニングをする中で、相手を観察し、相手の気持ちを思い、相手の立場に立つ支援の道を探り、アイスブレイキングを学ぶ中で、集団の場面や面接時などにおいて、緊張度の高い人に対して、それをほぐしながらコミュニケーションを深める実践の技術を学習させてきたのである。

そうした中で私たちは、送り出した卒業生に対する教育で、ソーシャルワーカーをはじめとする福祉従事者の資質向上に寄与してきたと自負している。

卒業生のアンケートにおいても、そのことに触れてくれており、私たちの教育の効果として嬉しく感じる側面もあった。しかし、今回のアンケートではその学習効果の中身まで詳細に尋ね切れておらず、今後の追跡調査の課題のひとつとなると考えている。

現在、大阪府レクリエーション協会が開催している「高齢者レクリエーション・ワーカー養成講習会」や「介護予防レクリエーションセミナー」等には、社会福祉現場の職員が多数参加しており、現場でレクリエーション支援方法を模索していることは容易に想像がつく。

また、現実には日々の業務に追われ、自身の余暇活動もままならぬ中、いくら介護予防や子育てで支援が叫ばれ、施設内だけでなく地域での実践の中でレクリエーション活動が果たす役割が大きくなりつつあるとはいえ、そこに積極的に関わっていくには、最長で5年目の彼らにはまだ経験が乏しい現実がある。上記の講習会に対しても「参加したい」という意向はありながら、

開催日時・場所等の問題もあり、参加できた卒業生はいないというアンケート結果も得た。

ここまでは、主たる資格に付加価値をつける事を中心に述べてきたが、この資格は個々のライフワークとして、仕事以外の余暇時間の生きがいづくりの側面に役立つ面もある。

全国47都道府県すべてに都道府県レクリエーション協会が存在している。大阪府レクリエーション協会では、「御堂筋カッポ」「府民スポーツ・レクリエーションフェスティバル」等の大阪府主催行事を支援しており、そこで、レクリエーション・インストラクターをはじめとする有資格者がスタッフとなり、府民の健康づくり、体力づくりの一役を担っている。また、大阪府レクリエーション協会主催のイベント・講習会もいくつもあり、ここでも有資格者が活躍している。

大阪府の課程認定校は現在49校ある。毎年、1000人前後の者がレクリエーション資格（レク・インストラクター、レク・コーディネーター、福祉レク・ワーカー）を取得して卒業している。これは一般養成で取得した者の数倍の人数である。このように年齢も様々な大勢の資格取得者がいるため、すぐにスタッフになれるわけではない。そこで、協会是有資格者のファローアップとして、「事業サポーター」制度を設け、登録された者に研鑽の機会を与え、新しいスタッフを養成している。更に研鑽を積んだものは、市町村から依頼を受けた「介護予防」「子育て支援」の教室に講師として出向いている。また、大学・専門学校の非常勤講師として活躍している者もいる。2年前からは、課程認定校卒業生だけの「ファローアップ講習会」も設け、新しい人材の発掘に努めている。

どの資格もそうだが、資格を取ることが最終目標ではなく、資格取得後に研鑽を積むことで、その資格が一層活かしてくる現実がある。ましてや、「レクリエーション・インストラクター」は、レクリエーション資格の基礎資格であり、この資格を取得する事により、専門資格である「福祉レクリエーション・ワーカー」「レクリエーション・コーディネーター」「余暇生活開発士」にも繋がっており、更新しているからこそ、情報が入り、研鑽の機会があるのである。このことを卒業にあたり学生が資格申請する際に、今まで以上に詳しく伝えておく事が必要だと感じた。

今後、彼らの活動が地域での実践活動にもつなげていけるよう、「市町村レクリエーション協会」にも働きかけ、さらに卒業生のサポートをしていかなければならないのだと強く感じた。まだまだ、「市町村レクリエーション協会」として組織化されている自治体は少ないので、卒業生が地元で活躍できるために、新しい「市町村協会」作りに尽力を尽くす事も必要だと強く感じた。そのために、さらに今回のようなアンケート調査を繰り返す中で、卒業生のニーズを探り、それに対応していきたいと考えている。

最後に、卒業生一人ひとりが、どのような気持ちで職場等のレクに臨んでいるのか、更にアンケートや面談などで個別に聞いていきたいと思う。それと同時に、私達が彼達に伝えたかったものがどれほど浸透しているのか（学習効果）ということも更に検証し、今後の資格養成にも生かしていきたいと考えている。

あとがき

奥野孝昭が「1 はじめに」、「2 レクリエーション資格の種類」、「3 本学におけるレクリエーション指導者養成の推移」、「4 追跡調査（対象と方法）」の執筆を担当、「5 調査結果と考察」の執筆を大西敏浩が担当した。

参考文献

- ・「レクリエーション指導者資格の更新に関する研究－特に、レクリエーション2級指導者の調査結果から－」（山本存、『自由時間研究』第13号、1993）
- ・「社会福祉現場におけるレクリエーション支援に関する基礎的研究－過程認定校卒業生の質問紙調査結果から－」（山本存、『自由時間研究』第22号、1998）
- ・「課程認定校におけるレクリエーション資格取得希望者に関する調査研究（1）－資格取得希望者の意識に着目して－」（山田力也ほか、『自由時間研究』第29号、2006）
- ・「課程認定校におけるレクリエーション資格取得希望者に関する調査研究（2）－テキスト・マイニングによる資格イメージに関する記述の分析－」（池田孝博ほか、『自由時間研究』第29号、2006）
- ・『楽しいをつくる やさしいレクリエーション実践』（日本レクリエーション協会、2000）
- ・『レクリエーション活動援助法（第3版）』（福祉士養成講座編集委員会、中央法規、2007）
- ・『レクリエーション支援の基礎』（日本レクリエーション協会、2007）
- ・『レクリエーション運動の五十年』（日本レクリエーション協会、1998）
- ・『大阪府レクリエーション協会50周年記念誌』（大阪府レクリエーション協会、1998）
- ・「レクリエーション協会公認資格を持つ介護福祉士へのアンケート調査結果報告書」（日本レクリエーション協会、2006）